

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520206

研究課題名(和文)大正期函館圏モダニズム文化の研究 長谷川海太郎・久生十蘭・水谷準を中心に

研究課題名(英文)Research about the Modernism culture of Hakodate at Taisho Period-with a focus on Kaitaro Hasegawa, Jyuran Hisao and Jun Mizutani-

研究代表者

小林 真二 (KOBAYASHI, SHINJI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50292488

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、亀井勝一郎が最も函館らしい作家として名を挙げた3名の作家、長谷川海太郎(筆名・牧逸馬、谷譲次、林不忘)、久生十蘭、水谷準の文学の背景をなす大正期函館モダニズム文化について調査・研究を行い、長谷川海太郎が函館中学校時代の先輩グループ、宣教師、家庭教師などとの文化的ネットワークの中で文学・思想・渡米意志などを育んだことや、阿部回漕店に生まれた久生十蘭が海運都市・函館を背景に「船」「ロシア」「海難」などのモチーフを文学に活かしたこと、そうした二人の先輩に導かれて水谷準が文学者として成熟していったことなどを明らかにすると共に、従来埋もれてきた彼等の新資料を多数発見することができた。

研究成果の概要(英文)：I research about Kaitaro Hasegawa(a pen name:Itsuma maki,Jyoji tani,Hubou hayashi),Jyuran Hisao and Jun Mizutani who are said the quintessentially Hakodate authors in Hakodate by Katsuichiro Kamei.This research shows about the Modernism culture of Hakodate at Taisho Period.As a result I find three things about the authors, First Hasegawa affected by his senior from Hakodate junior high school, missionaries and private teachers therefore he learned Literature, Idea and the will of foreign countries from the cultural network. Secondly He illustrated Ship, Russia and Wrecked ship because he was born Abe Kaiso-Ten. Thirdly Jun Mizutani grew up as the author influenced by Juran Hisao and Kaitaro Hasegawa and furthermore I found new valuable documents about them.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：函館 長谷川海太郎 久生十蘭 水谷準 地方新聞・雑誌 地域文化

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景は以下の3つの側面に分けることができる。

(1) 文学者研究の側面

長谷川海太郎(1900～1935)は、牧逸馬の筆名で主に通俗小説を、谷謙次の筆名で海外渡航記やモダニズム文学を、林不忘の筆名で時代小説を発表し、大正末から昭和初期にかけて大衆の圧倒的な人気を集めた作家である。生前(新潮社)・没後(河出書房新社)それぞれに全集が刊行され、現在も岩波文庫に『踊る地平線』が入るなど、一定の評価を獲得し続けている。学術的研究は1980年代後半以降の『新青年』およびモダニズム文化の見直しの機運の中で本格化し、実証的領域では室謙二『踊る地平線 めりけんじゃっぶ長谷川海太郎伝』(晶文社、1985)を皮切りに、川崎賢子『彼らの昭和』(白水社、1994)、同『叢書『新青年』谷謙次』(博文館新社、1996)が特に大きな成果を上げた。それらにおいては函館時代の活動についても調査がなされているが、本研究代表者が勤務大学主催の市民向け講座(2002年:北海道教育大学キャンパスネットワーク講座「北海道の文学」)や北海道主催の道民カレッジ大学放送講座(2004年「もうひとつの北海道文学」)、函館市文学館主催の講演(2005年、函館「不良(モダン)文学」は元町育ち 長谷川海太郎・久生十蘭・水谷準)などを行うに際し簡便な検証調査をおこなったところ、それらは多くの重要記事の見落としや誤りなどを含むことがわかった。

阿部正雄(1902～1957)は、久生十蘭の筆名でミステリやユーモア小説、歴史小説、少女小説など多彩なジャンルの小説を書き、1952年に歴史小説「鈴木主水」で第26回直木賞を獲得した作家である。全集は1960年代末～70年代初めにかけて刊行された(三一書房)後、2008年から新全集が刊行中(国書刊行会)2009年に岩波文庫に『久生十蘭短篇選』が入るなど、特に近年再評価の機運が高まっている。学術的研究は83年に「早稲田文学」で二号連続特集が組まれた辺りから本格化し、実証的領域では山田昭夫「久生十蘭年譜考」(「北海道文学」1967)などを礎に、江口雄輔・川崎賢子監修『叢書新青年 久生十蘭』(博文館新社、1992)、江口『久生十蘭』(白水社、1994)が特に大きな成果を上げた。それらにおいては函館時代の活動に関する調査がなされているが、本研究代表者が各種講座・講演(前出)準備や『久生十蘭「従軍日記」』(講談社、2007)掲載用の年譜作成のために検証調査をおこなったところ、調査不足による処女作の見落としや、出身学校などに関する事実誤認などを含むことがわかった。

納谷三千男(1904～2001)は、水谷準の筆名でミステリを中心に執筆し、1952年に「ある決闘」で探偵作家クラブ賞を受賞した作家であり、『新青年』などのミステリ系雑誌の

編集者でもある。現在に至るまでまだ全集は刊行されていないが、『新青年』再評価の機運の中で江戸川乱歩らが愛した短篇群が見直されると共に、ミステリ系雑誌を通して全国の若年層にモダニズム文化を発信し、また久生十蘭をはじめとする多くの作家を育てた名編集者としての手腕が見直されつつある。学術的研究はまだ皆無に等しいが、本研究代表者が各種講座・講演(前出)準備のために簡便な調査をおこなったところ、従来等閑視されてきた膨大な作品群を遺していることや、函館市弥生小学校時代の文芸作品、函館中学時代の阿部正雄との音楽活動に関する新事実などを発見することができた。

上記のような評価・研究動向と簡便な予備調査の結果から、三人の文学者それぞれの初期活動を研究する意義は十分に認められるものの、実際には必ずしも十分に研究されていないことがわかった。おそらく遠方在住の研究者が短期滞在中に行う調査にはやはり限界があったものと思われ、現在函館圏で日本近代文学の研究に携わっている者としては、これに積極的に取り組むことがひとつの重要な責務であると認識するに至った。

(2) 函館文学/北海道文学研究の側面

函館出身の文学者亀井勝一郎は、「函館は石川啄木の歌で有名だが、彼の歌は北方流離の歌で、必ずしも函館の特徴を示したものではない」と指摘し、「この町の気分を、よくもわるくもあらわしているのは牧逸馬と水谷準と久生十蘭である」と述べている(「北海道文学の系譜」、『読売新聞』昭29・8・16)。にもかかわらず、現在函館ゆかりの文学者としてのイメージはほぼ専断的に石川啄木によって形作られており、函館の文学に関する研究や教育関係書、解説書、観光ガイドの類でも啄木が偏重され、彼ら三人が取り上げられることはきわめて少ない。

一方、北海道の文学といえば一般的には土と取り組む文学が重視され、それ以外の文学は軽視されてきた傾向がある(神谷忠孝「北海道の小説」、『公開講座 北海道文化論 北海道の文学』、札幌商科大学学会、1984・3)。

啄木の抒情とも土と取り組む文学とも異質な彼ら三人のモダニズム文学の出発点とその背景を明らかにすることは、地域文化の見直しが図られる昨今では特に重要と考えられる。

(3) 函館圏文化研究の側面

彼ら三人の函館での活動は、開港以来函館圏を色濃く彩ってきた海外文化や、当時函館圏の若者たちを中心に一大隆盛を見た文学・演劇・音楽などのモダニズム文化と密接な関係を持ったと考えられる。彼らの活動の背景をなした当時の函館圏の文化のありようについては、『函館市史 通説編 第3巻』(函館市、1997)や、清水一郎が1960年代に「海峡」に発表した久生十蘭周辺の演劇活動に関する論考、竹内修一が1990年に「地

域史研究 はこだて」に連載した「大正期函館の洋楽事情 アポロ音楽会の活動とその前後 (上)(下)」などが先鞭を付けているが、彼ら三人の多面的活動と重ね合わせつつ必要に応じてさらに詳細かつ横断的に調査することで、函館圏文化の輪郭をより立体的に捉える余地は十分に残されていた。

2. 研究の目的

(1) 彼ら三人が函館文化圏でなした活動について、従来の調査不足を大幅に補いつつ、彼らの思春期以降に当たる1915年頃～1928年頃までを中心に、徹底的な文献調査により明らかにする。

(2) 当時の函館文化圏におけるモダニズム文化の特徴を捉え、彼ら3人の文化的活動の背景に迫る。

(3) 彼ら3人の函館在住時の基本的な履歴について、従来不明瞭だった出生地や家庭環境、就学状況、交友関係などについて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本人の著作や同時代関係者らによる発言、先行研究などを全て収集し、彼らの函館時代に関する既存情報を整理し、以後の調査のための手がかりを得る。

(2) 遺族・関係者、出身校や役所などに取材し、彼らの函館時代の基本的な履歴に関する事実関係を明らかにする。

(3) 1915年頃～1928年頃までに函館で刊行されていた新聞・雑誌における彼ら3人の執筆した記事、彼ら3人の活動に関する記事を、主に函館市中央図書館所蔵資料を活用して調査・研究し、彼らの活動を明らかにする。

(4) 1915年頃～1928年頃までに函館で刊行されていた新聞・雑誌・図書・行政資料や、当時の函館に関する図書などを主に函館市中央図書館所蔵資料を活用して調査・研究し、当時の函館圏のモダニズム文化の概要を捉え、彼ら3人の文化的活動との関係性を明らかにする。

4. 研究成果

研究の成果を三人それぞれに分けて記せば、おおよそ以下の通りとなる。

(1) 長谷川海太郎(牧逸馬・林不忘・谷譲次)関連

従来は、青少年期の海太郎の醸成には父・長谷川淑夫の影響が最も重要視され、たとえば川崎賢子『彼らの昭和』(白水社、1994・12)には、「海太郎は、父の息子だった。少年のころから、語学と、憤慨調の弁論と、歌作には、熱心だった」と記されていた。今回の研究によっても父の影響の大きさはうかがわれた一方で、函館中学校時代の先輩グループを中心に、宣教師や家庭教師など、函館

の文化的ネットワークの影響も甚大であり、函館を離れた上京時代の活動(1917～1919)や渡米決行(1920)にも大きく寄与したことが明らかになった。

函館時代の著作活動については、川崎賢子『叢書『新青年』谷穰次』(博文館新社、1995・4)や工藤栄太郎『丹下左膳を読む 長谷川海太郎の仕事』(西田書店、1998・3)に記載されていない28件を新たに発見することができた。中には久生十蘭との交流を裏付けるものや、米国放浪から帰国後に全国のモダンボーイ達を湧かせた、いわゆるメリケンジャップものの原型なども含まれており、きわめて貴重である。なお、川崎により「迂名気迷子」が海太郎の筆名の一つであるという説が定着しているが、実際には武富安雄の筆名であることも確認された。

函館時代の伝記的事実としては、明治末期の住居、函館中学同盟休校事件の詳細、選挙応援演説、労働問題の講演などについて、明らかとなった。

帰国後の職業作家としての執筆活動についても、浅子逸男編「林不忘作品目録」(『賊徒』3号、1995・3)等の先行研究に未記載の15件の新資料を発見することができた。

上記成果の一部は既に地元函館市民対象の講演で公開したが、今後早急に活字化を進めたいと考えている。

(2) 阿部正雄(久生十蘭)関連

従来は十蘭文学と地元・函館との関連は皆無に等しいと考えられてきたが、生家・阿部回漕店をめぐる調査を通じ、十蘭文学における「船」「ロシア」「海難」などのモチーフの背景に、明治末から大正にかけての海運都市・函館が位置することが明らかとなった。

函館時代の著作活動については、2011年9月までに江口雄輔『久生十蘭』(1994・1、白水社)などの先行研究に未記載の新資料9件を発見した。地元函館での市民向け公開講座で報告すると共にブックレットにまとめたほか、刊行中だった『定本 久生十蘭全集』編集部(国書刊行会)に情報および資料を提供し、同全集10巻(2011年)の充実寄与した。さらに2013年にはもう1件を発見し、所属地方学会誌で紹介した。

函館時代の伝記的事実としては、生家の住所や職業、青年期のアマチュア音楽家としての活動、中村建築研究所での勤務、『函館新聞』記者としての活動の詳細等を明らかにできた。

(3) 納谷三千男(水谷準)関連

函館時代の久生十蘭との音楽・探偵小説犯人当てなどの交流や、上京後の駆け出し作家・編集者時代の長谷川海太郎との交流を示す資料などを通じ、函館中学校の両先輩との関係を先行研究よりも具体的に明らかにすることができた。

弥生小学校時代の成績、作文、童謡等の資

料などを通じ、三人の中で随一の優等生的性情を明らかにすることができた。

職業作家としての執筆活動についても、小松元博「水谷準研究」(http://mizutani.s41.xrea.com/index.html)などの既存のリストに未掲載の50件以上の新資料を発見することができた。

遺された大きな課題は、主として三つあると考えられる。

研究テーマの主眼であった「大正期函館圏モダニズム文化」そのものについては、必ずしもめざましい研究成果を上げることができなかった。大きな原因としては、A)最重要資料である大正期函館三大紙(『函館新聞』、『函館毎日新聞』、『函館日日新聞』)の電子データ化作業への着手が遅れてしまい、これに伴い調査が不十分に終わってしまったこと、B)大正期文化を理解するためには明治40年代資料への遡及調査が不可欠であるにもかかわらず、殆ど着手できなかったこと、の2点が考えられる。

個人情報保護の観点から、役所や学校、関係者に当たって作家個人の履歴を調査することの困難にしばしば直面し、十分な成果を上げることができなかった。個人情報の取り扱いに対する十分な配慮を徹底しつつ、関係各所との良好な信頼関係を築き上げながら粘り強く取り組んでいく必要があると痛感している。

水谷の執筆活動は当初の予想を遙かに超えて旺盛であり、特に戦後の執筆活動についてはまだまだ調査が決定的に不足した段階にとどまってしまった。また、『新青年』編集者としての活動についても、誌面・執筆陣構成や編集後記、エッセイなどの分析を通して検証していく必要があると考えられる。江戸川乱歩や横溝正史の研究が進展しつつある中で、彼等の盟友として常に併走し続けた水谷の文学についても、早急にその全貌が明らかにされる必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小林真二「久生十蘭新資料紹介」『函館評論』掲載「漫舌」その他」(『函館国語』28号、2013・11)pp50-54, 査読無

小林真二「“めりけんじゃっぷ”は元町育ち」(『人間と地域』第5号、2013・3)pp20-25, 査読無

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

小林真二『函館学ブックレット 函館時代

の久生十蘭 新資料紹介を中心に』(2012・3、キャンパス・コンソーシアム函館), 総頁数77

[その他]

(計8件)

[A: 学術雑誌以外での活字発表]

小林真二「函館モダン文学史縦覧 “夢十夜”に寄せて」(『タウン誌 街』536号、2012・10)pp.22~23

小林真二「葡萄畑から」(『定本 久生十蘭全集 月報11』2012、国書刊行会、pp.5~7)

[B: 地元函館での市民向け講演]

函館市文学館「文学の夕べ」講演・小林真二「函館モダン文化と長谷川海太郎 “一人三人のモンスター” 誕生の謎に迫る」(2013年10月15日、於: 函館市文学館)

函館市中央図書館・函館朗読奉仕会主催、函館市中央図書館共催、函館市文化スポーツ振興財団・函館文化会後援「函館朗読紀行 vol.6 小説の魔術師 久生十蘭~モダン都市函館が生んだ作家」講演・小林真二「久生十蘭の魅力」(2012年7月26日、於: 函館市中央図書館)

函館朗読奉仕会講演・小林真二「久生十蘭人と魅力」(2012年6月21日、於: 函館市総合福祉センター)

キャンパスコンソーシアム函館合同公開講座「函館学2011」第4回講座・小林真二「函館時代の久生十蘭 新資料紹介を中心に」(2011年10月1日、於: 北海道教育大学函館校)

[C: 情報・資料提供]

「特集 大正モダンシティの青春 日本中を熱狂させたモダンボーイの故郷、函館」(JR北海道車内誌『THE JR Hokkaido』297号(2012・11、(株)北海道ジェイ・アールエージェンシー)への取材対応

『定本 久生十蘭全集 10』(2011・12、国書刊行会)への情報および資料提供

6. 研究組織

(1)研究代表者

小林 真二 (KOBAYASHI SHINJI)

研究者番号: 50292488